

リマ日本人学校での土曜授業の実際と、その在り方

前リマ日本人学校 教頭

宮崎県串間市立串間中学校 教頭 吉 村 昭 範

キーワード：土曜授業、現地理解、日本人学校の在り方、派遣教員

1. はじめに

私が派遣された年からリマ日本人学校では、土曜授業を教育課程に組み入れた。この取り組みを子どもたちや保護者がどう受け入れるのか、また、そこで何を学ぶことができるのか、そして、教職員がどのような課題を持ち、次年度へ生かすことができるのかを実践を通して感じたこと、考えたことを、日本人学校の今後の展望も含めご紹介したい。

2. 土曜授業の実施に際して

実施に際しては、実施年度までに協議を重ね、年間4回の土曜日の午前中で行うこととなった。その際に、実施する際の留意点として次のような確認が行われた。

(1) 確認内容

実施する土曜日を授業日とすること。午前中の実施とすること。全児童、生徒の参加とすること。スクールバスを運行すること。学校開放の意味を踏まえ、保護者の参観を可とすること。外部講師を有効活用してもよいこと。全職員で計画、運営を行うこと。

3. 研究の実際

年間4回で何を行うのか、これについては十分な計画がない状態でのスタートだった。日程だけは教育課程の中に組み入れるが、その内容については、年度がスタートしてから、協議を行うこととなった。派遣教員の専門性や、子どもたちや保護者の考え方を踏まえての内容決定とした。この時点で、教職員の頭の中にはある程度の構想はあった。

土曜授業は座学よりも体を動かし、楽しめる内容の実施が好ましいこと、終わった後に充実感が味わえるもの、保護者も参加できたり、楽しめたりする内容が好ましいこと等を教職員で共通理解した。土曜授業のことを「わくわくタイム」と呼び、子どもたちが「今日は何をするんだろう」というわくわく味の授業を目指し、担当の先生だけに任せるのではなく、すべての教職員が協力して行うことでスタートした。

(1) 暗中模索の1年目の土曜授業

① 新鮮な気持ちでの「わくわくタイム」

第1回目は【ペルーでドキ土器♡陶器づくり】と題して、美術科担当の先生の計画により実施した。児童生徒の出席率が心配であったが、全員の参加であった。参加者の年齢層に差があるため、事前に保護者に協力員を依頼しておいた。とても円滑に運営を行うことができた。保護者を巻き込んだ図工や美術の授業にとどまらず、外部からその道の専門家を招いての授業は、子どもたちにとって相当なインパクトがあったようだった。



体育館での陶器づくり

② 人と人のつながりの大切さを知った「わくわくタイム」

第2回目は【琉球の三線と歌にふれよう！】と題して、ペルーで活動をしている方々7名を講師としてお招

きして実施した。本校の社会科講師の先生が講師と現地で知り合うことで実現したものである。「是非学校の子どもたちに三線の素晴らしさを伝えたい」という思いと、「ペルーに移民して来た沖縄の方々の思いを知りたい」という思いが相まったものである。

ただ三線を指導するのではなく、ペルーに住んでいることの意味を考えさせ、そしてペルーという国を知ることや、この地で知り合った仲間への感謝の気持ちを想起させるものであった。

児童生徒にとっては、初めての楽器、沖縄の方言の意味を理解しての歌、どちらも貴重な体験であった。保護者にとっても、わが子が必死に練習をしている姿や、初めての三線をどうにか操れるようになっていく姿を見てもらえたのは、土曜授業だからこそなのかと感じた。

③ 毎年の恒例行事として実施したい「わくわくタイム」

第3回目は現地の日系校ラ・ヴィクトリア校との【サッカー交流】を実施した。

- 土曜日に行くことで、多くの方々に学校や子どもたちの様子を見てもらい、学校を開いていく。
- 治安上、自由に遊ぶことが難しい子どもたちのために、友達と一緒にスポーツを楽しむ場をつくる。
- 日系校との交流を通して、豊かな人間性を育む。

これらの3つのねらいを踏まえ、スポーツでの交流を全面に出し、計画を行った。ただサッカーの試合だけではなく、サッカーの試合を行うチーム、体育館でバスケットとポートボール・ドッチビーを行うチーム、中庭で羽子板、けん玉、バドミントンを行うチーム、サッカーの応援を行うチームに分けてローテーションで回るようにした。

④ 世界で働く親の姿を見てもらう「わくわくタイム」

第4回目のわくわくタイム（年度最後の回）は【ペルー味の素社カヤオ工場見学】を実施した。学校からバスで1時間、校外での活動は安全対策が重要であることを実感した。この工場見学が実現したのは、日本人学校の保護者で、ここに勤務している方がおられ、快く引き受けて下さったことによるものである。

みんなが一番驚いていたのが、工場に飛んでくる鳩を追い払うために週に1度、鷲を連れてきているということだった。しかし、忘れてはならないのが、ただ見学に行ったのではないと言う事である。この見学のために、事前オリエンテーションを計画し、ワークショップまで行って準備をしたという点である。

事前に学習することで一企業という見学ではなく、日本の企業、保護者の仕事という観点から学ぶことができた。日本ではなく、外国で日本の企業が果たしている役割や、海外だからこそできること、海外だから特に気をつけていること、そして海外で働くことの難しさも子どもたちは少し実感できたように思う。



ペルー味の素工場見学の様子

(2) 定着の見てきた2年目、3年目の土曜授業

1年目の成果と課題を検討し、2年目も継続して土曜授業を実施することとなった。そして3年目についても、継続され、子どもたちや、派遣教員の現地理解の手段としても有効なものとなった。以下、実際に行った2年目、3年目の項目について列記したい。

① 目的を設定しての「わくわくタイム」

ペルー料理体験と題して、ペルーでは有名な料理研究家の講師のお二人を招いてペルーの家庭料理を作った。今回の料理作りは、食べるのが目的ではなく、作り方を覚えて家庭でも一緒に作って貰いたいというものがある。日本での「弁当の日」に、親子が一緒になって料理をするというものに似ている。

② 準備周到の中に楽しさのある「わくわくタイム」

「Parque Zoologico Huachipa」というペルー郊外の動物園でのウォークラリーを行った。

入念に下見を行い、チェックポイントの場所や、集合場所、写真撮影の場所まで決めておいた。安全面においては、先生たちの役割分担、警備員の配置状況を綿密に決め、当日は何事もなく充実した活動が実施できた。

③ 恒例となった「わくわくタイム」

昨年に引き続きラ・ビクトリア校とのサッカー交流（スポーツ交流）を行った。スポーツを通して交流が深まるだけでなく、同じ年齢の子どもたちが世界各地で頑張っているということを実感することができた。

④ ペルーならではの「わくわくタイム」

「ペルーってすごい！アルパカで染め初め体験！」と題して、織物や染色に詳しい講師をお招きして実施した。植物や昆虫から色を出すことに驚きながらも、自分用のスカーフを完成させることができた。ペルーでしか体験できないものだった。

⑤ 新たなスタート、3年目の「わくわくタイム」

派遣教員が5人入れ替わった中での土曜授業であった。講師はペンギンの保護活動をされている佐野淳さんをお願いした。体を動かす活動を入れてもらうこと、また、保護者も一緒に活動をさせてもらうことをお願いした。どの時点で講師依頼を行い、担当を誰がやるのか等、今回の土曜授業は、5名の派遣教員の入れ替わりの中で、どう継続させていくかの重要な意味を持っていた。

⑥ 児童生徒の進歩が見えた「わくわくタイム」

継続して行っている現地の日系校ラ・ヴィクトリア校との【サッカー交流】を実施した。今回は担当者が変わっての実施となった。今後の流れを受け継ぐ貴重な計画となった。サッカーでの交流以外にも、交流校であるラ・ビクトリア校に行き、学校の様子を見たいという生徒が多数でできたことは大きな収穫だった。

⑦ 文化を味わえた「わくわくタイム」

グラン・テアトロ・ナショナルという国立劇場の見学を行った。個人的には決して入れない場所も見学ができ、ステージの上で合唱も体験させてもらった。学校から車で20分の所にこんな素晴らしい文化施設があることにも驚いた。

⑧ 歴史の深さを知った「わくわくタイム」

パチャカマック遺跡へ見学に出かけた。学校から30分のところにペルーの歴史を学べる場所があるのだ。博物館で歴史について学習した後は、遺跡を歩いて見て回った。事前学習していたこともあり、多くの質問をすることもできた。この日のために教員3名が下見も行った。事前学習と下見は必須のものであると実感した。

4. 今後の展開と日本人学校の在り方

土曜授業に限らず、今後の日本人学校の在り方については、十分に議論されなければならない。土曜授業を展開したことは、これからの日本人学校の存続のためのヒントになるのではないかと考えた。

(1) 日本人学校に入ってくる子どもたち

- ① 親の海外勤務に伴い日本から来る児童生徒
- ② 日本以外の海外から親の転勤のために来る児童生徒
- ③ リマで生まれ、そのままりマのローカル幼稚園に入りそこから来る児童
- ④ 両親のどちらかがペルー国籍で、日本で生活をしていたが、母国と一緒に戻って来る児童生徒
- ⑤ 現地の学校やインターに行っていたが、そこから日本人学校に来る児童生徒
- ⑥ 両親どちらかの母国の文化を感じさせたいという思いで、短期間日本から来る児童生徒

(2) 近隣の学校

現地校、日系校、インターナショナルスクール、現地校だが経営者が日系人というように大別できる。どの学校にも特徴はあるが、それぞれの学校が、子どもに身につけさせたいこと、日本の学校で教えていると思ってい

る事、真似したいことは次の通りである。

- ① 整理・整頓すること
- ② 安全に過ごすこと
- ③ 決まりを守ること

いろいろなパターンで日本人学校に入学・編入学をしてくる児童生徒が求めているものは、日本語を忘れないようにであったり、日本人としての道徳性やマナーを身につけさせたいという親の思いであったりと多種多様である。このことは日本人学校のセールスポイントとなり、学校存続の鍵となる。今後、土曜授業や、日本ならではの文化祭や運動会等の学校行事での特色をさらに見出していくことが必要である。

5. 成果と課題

年間で4回、3年間で12回の土曜授業を実施した。この他にも、授業参観日、文化祭、水泳記録会、卒業式等も土曜日に実施されている。また、PTA主催の催しも土曜日に行われた。

3年間を通して共通して言えるのは、保護者の意見の中に土曜日だから両親で参加できるので良かったというものがあった。その反面、せっかくの休みなので家庭で使いたいというものもあった。土曜日に、各種検定が実施されることも多く、保護者の負担も大きいのは事実である。

これらの保護者の意見・感想、職員の感想を基に、今後どのような方法が一番良いのかを見いだしていき、リマ日本人学校ならではのものとして定着させていかなければならない。

子どもたちにとって何を学び、何を感じたか、そしてどのように学ぶかが重要である。まさに、新学習指導要領の改訂の主旨そのものなのだ。もちろん保護者の協力がなければ土曜授業は実施不可能である。

この土曜授業が今後も計画的に継続されるためには、教職員の事前の調査や、学習が必要である。「子どものために」という気概を忘れることなく進めていかなければならない。

また、派遣教員の中には、保護者の大多数の継続の支持があるにもかかわらず、少数意見についての正当性を主張し、他の派遣教員のやる気を損ねる恐れのある発言をするものも出てくることがある。そんな時は、派遣教員としての原点について理解させ、派遣教員が共通理解を図らなければ、きっとどこかのタイミングでこの土曜授業は消滅してしまうものとする。派遣教員としての気概、志をどう持っているかが今後の継続の鍵となるのだと考える。海外に派遣され、そこで学んでいる子どもたちに、異国の地で企画したものをどのような手段で、どのように伝えるのか、教員としての力量が問われるのである。

この土曜授業を継続させることは、派遣教員がリマ日本人学校をどのようにしたいのか、つまり何を売りにするのかということであり、もし継続できなかつたり、縮小したりするようであれば、保護者は残念がると共に、先生達は意欲がないと判断されてしまうだろう。

授業時数の確保や保護者が参加しやすい、ペルーでしか経験できないことを伝えたいかを言う前に、派遣教員が子どもたちのために何かをしてあげたいと思えるかどうかなのだ。

3年間、土曜授業の計画から運営とその関わりをみてきた。土曜日の意義は海外の場合、日本と異なることを実感しながら、毎回改善を繰り返して、多くの意見を貰いながら実施してきた。

みんなが一緒になって活動することの楽しさを子どもたちの笑顔から感じ取ることができた。そして、やってよかったと毎回思えた。だからこそ、これからのリマ日本人学校の土曜授業が子どもたちにとって有意義なものになり、リマ日本人学校らしさとなることを期待している。